

週刊

2011年12月28日 No.16

晩 原発関連情報

インターネットをしらない人のために

編集・発行責任/853-3321 長崎県新上五島町綱ノ浦85-37 歌野 敬
☎0959-42-3427 eメール utano@lime.ocn.ne.jp

茨城⇒沖縄避難の高1女子生徒が恩師にあてた手紙

木下黄太ブログ
12月17日付より

お元気ですか？私たちは沖縄に移住し、父、妹は茨城に残っています。

私は確実に被曝をしています。症状がかなりでています。主に甲状腺が腫れたり、鼻血 じんましん 免疫力低下などです。

自分でもびっくりするくらい体に異常が起きていて、そのまま茨城にいたら、近い将来 死んでいたかもと沖縄の医師に言われました。

先生方は公務員ですから、動けないことも、放射能について生徒に教えることができないのもよく分かっています。様々な情報から真実を知った時、すごく苦しみました。もうすでに何人の人が死んでいるのか、ご存知ですか？私たちの世代が、あと10年後、それよりも早くごっそりいなくなると言われています。

茨城にいる友達が心配で仕方ありません。ネットを通して、みんなに情報を流していますが、今がよければいい、どうせ子供産めないから、うちの親は公務員だから動けないなど、将来に対して後ろ向きな考えばかりです。仕方ありません。高校生が事実を知っても、親に言えず、不安な毎日を過ごすばかりです。だからその親に一番、放射能の怖さを伝えられるのは教師だと思いませんか？ そのためにリスクはかなりあるかもしれませんが、それでも子供たちは 大人の宝物ではありませんか？今の子供たち

ちを守れるのは大人しかいません。残念ながら、国は子供の命より経済をとってしまいました。もし、将来がんが増えて、国にあの時の放射能が原因だと訴えても 因果関係なしといわれるでしょう。原発が爆発したときの「ただちに影響はない」、ただちにですよ！将来はどうかです。

もし、今までどおり普通に暮らしていれば、将来苦しむことは、はっきりわかっています。私は今がよければいいなんて絶対に思いません。今、なんてどこでもできます。今いる場所によって将来が大きく変わるのです。私はこちらにきてよかったと本当に思います。ですが、一番気掛かりは茨城、関東、東北にいる子供たちの未来。本当に怖いのです。誰も悪くありません。誰も責められません。しいていうなら、国と東電。私たちは皆被害者です。だからこそ、自分の命は自分で、子供の命は親で守らなければいけないと思います。

先生、どうか放射能について真実を調べてください。どうかそれをたくさんの人に教えてあげてください。大事な生徒を守ってください。そこからは、それぞれが決めることです。

茨城での食生活 空気感染に十分お気をつけてください。ありがとうございました。

棄郷ノート

小河原律香

さっぽろ自由学校「芯」通信「卯うひろば」第130号（7月）から

おがわら・りか：ピアノ講師。福島県須賀川市⇒栃木⇒須賀川⇒札幌と避難。帰郷・避難を辿るも、除染の限界や内部被曝の危険を知り11月からは甲府に移住。生活の再建とピアノ教室の再開を目指す。「放射能からいのちを守る全国サミット」実行委員長。29歳。

いま干したらお日さまと風で数時間後にはすこやかに乾く。そう信じて洗濯物を干す。今日はもちろんのこと、数日後だって家族三人で食卓を囲めると信じて食材をまとめ買いする。明日が必ず来ると信じないことには生活なんて成り立たない。

何年後かに何人か、また子どもを持てるだろうと信じていた。だから家を建てる時には子ども部屋を三つも作ったし、冷蔵庫を買うときには容量の一番大きいものを選んだ。福島県須賀川市の入り組んだ路地の突き当りにある白い外壁の家で、平凡ながらも堅実で安定した生活を営んでいくために。

3月11日にとっても大きな揺れに見舞われた私は、

いろいろあつて無邪気に明日を信じる事が出来ないまま生きている。今まで生活を営んでいた場所から遠く離れたところにおいて、ここで生きて行こうとしている。放射能汚染によって、私たちのすべてを根こそぎに奪われたから。

「あれ」に覆われたあとの福島県で、私はどんな生活をしてきたのか。

スーパーマーケットへ行ってペットボトルの水をその日に買えるだけ買う。水が汚染されている恐れがあり、料理に水道水が使えないためだ。

野菜売り場では遠い南のまちから来たものだけを

買う。熊本県産の筍、鹿児島県産のいんげん、高知県産のピーマンと茄子。そんなものしか手に入らなかった。

来る日も来る日も同じ材料でなんとか目新しいものを作ろうと苦勞した。野菜は、汲み置いて竹炭を入れておいた水で時間をかけて洗った。米を研ぐ水がもったいなくて無洗米に替えた。

外出するという事は被曝量が増えるということだ。だから外に出ることは命をすり減らすことであり、娘を私の職場に連れて行くことにも幼稚園に連れて行くことにも、あるいは息を吸わせることにもいちいち覚悟が要った。だからほとんど外出をしなかったし、彼女を外に出すときには口元をびたりと覆うマスクをさせ、合羽を着せ、帽子を被せた。さらに、地面にある放射性物質の付着を避けるために必ず抱くか負ぶうかして娘を運んだ。

ぶちまかれた放射能をなかつたことにして、無頓着を装って暮らす努力をしたこともあった。でも結局、そんな無責任を貫くための狂った精神を、保てるはずがなかった。

私はおよそ50人の生徒を抱えるピアノ教室を運営していた。レッスンを再開すると子どもたちが嬉しそうに教室にやってきた。マスクもせず、自転車を思いっきり漕いではあはあと息を弾ませながら。音楽やピアノや私を愛してくれているんだなど知った。

3月10日まで、福島県の子どもとほかの都道府県の子どものは同じだった。でも今や違う。放射能まみれにされ、神経を麻痺させられてこの地に留めおかれている。この国の犯したへまを隠し、経済の発展を守るために。

子どもたちを見て発狂しそうになる心を押しとどめるのは容易なことではなかった。やはりこれは間違いだ。この土地でピアノも音楽もない。ここは、これから先何も生まれることのない土地だ。生み出そうとしてはいけない土地。だんだんと渴いてガサガサになっていく脳味噌の奥でなにかが壊れて、新しくなにかが生まれた。その正体がいまも分からない。責任感でも使命感でもない。ただこの世の地獄にぐちゃぐちゃとまみれたいと願う、からだの奥からの餓えた欲求のようなもの。

5月22日に教室を閉めることにして、子どもたちと母親を集めて最後の会を持った。そこで私は「ここに子どもを留めておくことは最大級の無責任だと分かりました。約10年間子どもの教育に関わってきた者として、ここにいることにNOを言います。今後は北海道でピアノ教室をやるから、習いたい人は一緒に来てください」と言った。あとのことは誰にも言いたくない。

5月23日に娘が鼻血を出した。もう持ちこたえられない。北海道に逃げる、と決めてから行くまでの猶予が半日しかなかった。夕方帰宅した夫に「明日北

海道に行く」と告げた。彼は「そんなに鼻血が心配なら明日病院に連れていけばいいじゃないか」と言う。病院に行くためにまた被曝しろってことか。話にならない。

放射能を避けるために、家事だって煩雑を極めた。それでもどのくらい「あれ」を避けられているのかなんて分かりやしなかったし、どのくらい体が触まれているのかも分からなかった。分からないことは何より恐ろしい。想像ばかりが滲らんでしまうから。窓から、冬の終わりに娘と一緒に植えたチューリップが愛らしい花を咲かせているのが見えた。昼間それを触ろうとした娘を厳しくたしなめたばかりだった。幼稚園入園に合わせて彼女の好きな色ばかりで埋めた花壇は、私が夫にせがんでつくってもらったものだ。毎朝娘を励ます力になるはずだった花が、放射能をまとめて風にゆらゆら揺れている。娘がその幼稚園に通うことはなくなった。そして私は、夫になにかを伝える気力すら無くした。

深夜まで無言で荷造りを続けた。私には彼の顔が今までと全く違って見えたが、彼にとっても私はなにか恐ろしいことをしようとしている、想像を超えてしまった得体の知れない存在に見えたに違いない。

その合間、知り合ったばかりのテレビ屋からメールが届く。私が逃げることをどこかで聞きつけたらしい。早朝福島に着くようにいま東京を出たという。朝早く起きてテレビ屋を迎え、荷造りをしながら娘に朝食を作り、夫に出来る限りの食べ物を作って冷凍した。化粧をし、着替えをし、そのすべてをカメラに収めてもらいながら福島空港へ向かった。

営んできた暮らしを余すことなく映像に残してもらったことで、とても平静な心で離陸を待つことができた。それは、確かにこの町で私が生き、結婚して娘をもうけ、家を建て、庭で好きな植物を育てて生きてきたという記録が残されたからだ。

娘に鼻血を出させてまで福島に留まったのは、そこに希望を見出してしまったからだ。あそこにしか私たちの暮らしはないのだから、それは至極当然のことなのだけれど。何度も絶望を繰り返してようやく過去を捨てる決意ができた私には、ひとつ、とても反省していることがある。

それは、所有しすぎたことだ。土地を所有してその上にばかどかか家を建ててしまったこと。夫を持ち車を持ち、木まで持っていた!! なんとという傲慢だろう。

少し考えれば分かることだ。そんなものを持ったつもりでいても、所詮まやかしだってこと。他人も土も木もなせ動くか自分で理解できていない機械も、私には本来持てるはずもないものばかりなのだった。結局、自分で持てる容量の赤いスーツケースに私が詰めたのは、自分のスタイルに馴染んだ衣類と結婚以来使ってきた食器だけだった。

夫と揃いで使っていたものは私のぶんだけ持ってきた。残された食器を彼がどういう思いで使っているのか、あるいは使っていないのかは分からない。娘のためにと詰めたのは、彼女の薄い顔立ちに合う優しい柄の洋服。何度も一緒にクッキーを作った思い出の詰まった抜型。そして娘の大好きなグラタンを焼くための皿だった。

札幌で借りた部屋に入居した日に、新聞紙で包んだ食器を出した。役目を終えて皺だらけになった新聞紙には、この震災で何人亡くなったか、避難所で人がどう生活しているか、原子力発電所がいかに安全を保ちつつ壊れているか、なんてことが書かれていた。とても空々しく。一人ひとりがどう命を失っていったか、生きている人が避難所や放射能汚染地帯でどう摩耗しているのか、記事から読み取れないことを想像すると狂いそうだ。

それらの皺を一枚いちまい伸ばして紙袋に突っ込んだ私は、「この新聞紙、もったいないから揚げ物の油きりに活用しよう」と考えていた。

ここは静かに落ち着いていた。

どんな土地にいても、コンクリートの家でも木造の家でも、大きい家でも小さい家でも、私は繰り返す。クッキーを作り、グラタンを焼き、娘のすこやかな成長を希うことを。

心臓が繰り返す鼓動を打つと同じように、何度でも淡々と繰り返そうと思っている。(12月20日)

危機一髪の東海第二原発 添田孝 ビジネスライター

『世界』1月号「東海第二原発はなぜ廃炉にしないではないか」から

東海第二原子力発電所(茨城県東海村)は東京駅から115kmのところにある首都圏唯一の原発だ。津波を防ぐ側壁を新設する工事が終わったのは東日本大震災のわずか二日前。メルトダウンの危機はぎりぎり回避されていた。

揺れはじめた時、東海村の村上達也村長は役場三階の村長室で客と懇談中だった。部屋は振幅50cmぐらいで揺れ続けた感じだったという。震度は6弱。飾り棚の陶芸品や彫刻が落ちて壊れ、書類もみな床に散らばった。

窓からは瓦が落ちている家が多く見えた。すぐに災害対策本部を立ち上げ、情報収集と道路などの危険箇所の対策に忙殺された。村内では火力発電所の煙突で作業中だった4人が亡くなったほか、揺れで数十棟が全壊した。

役場から東約3キロに、日本原子力発電(原電)の東海第二発電所がある。「いつもの地震の時と同じように止まっただろう」と、あまり心配していなかったという。テレビでは福島第一原発が全電源喪

失というニュースが流れ、そちらに目を奪われていた。

原電から第一報がファクスで入ったのは23時過ぎ。目を通すと、やはり自動停止しており、原子炉の圧力や推移、温度はさほど心配なものではなかった。東海第二も危機一髪だったと聞いたのは4月になってからのことだった。

「背筋が凍った」と村上さんは言う。「我々も全村避難だったら3万7000人も逃げられただろうか。今頃どこにいただろうか」

福島第一の事故で広く知られるようになったが、原発は停止した後からも冷却や制御のために大量の電力を使う。原子炉一基で一般家庭1万数千世帯分が必要だ。東海第二でも電力確保は綱渡りの状況だった。

地震直後、東海第二は揺れのために自動停止。東京電力の送電線から送られてくる外部電力は2系統ともとまった。非常用ディーゼル発電機3基が始動して原子炉の冷却を始めたが、うち1基は津波の影響ですぐにとまった。発電機を冷やすためのポンプが津波で約2mの深さまで水没したためだ。

浸水の原因は、新設した側壁の一部でケーブルを通す穴を塞ぐ作業が終わってしまっていたためらしい。残り2台ある冷却用ポンプは無事だった。これを使って非常用ディーゼル発電機を動かし続けることができた。13日には外部からの送電が回復。15日に冷温停止状態にこぎつけた。

原電は、従来は高さ4.86mの津波を想定していた。2007年から見直し作業を始め、想定する津波高さを0.86m引き上げ5.72mにした。それにあわせ、これまでより1.2m高い側壁を作り始めたのは2009年7月だった。

東海第二を実際に襲った津波は高さ5.3m(当初は5.4mと発表)。古い側壁より40cm高く、新設した側壁の上端まであと80cmだった。工事が間に合っていなければ、もしくは津波がもう少し高ければ、すべての非常用ディーゼル発電機が停止し全電源喪失の事態に陥るところだった。「福島第一の事態になった可能性は否定できなかった」(原電広報室)。

なぜ原電は最近になって津波の想定を見直し、対策工事を進めていたのか。

話は2002年にさかのぼる。

この年の7月、政府の地震調査研究推進本部(地震本部)は、M8.2前後の津波地震が三陸沖から房総沖にかけて日本海溝のどこでも発生する可能性があるとして発表した。確率は今後30年間に20%程度と予測された。津波地震は海溝付近で大きくずれ動くため、パルス状の高い津波をもたらす。津波の高さは最大11メートルという試算があった。

ところが政府の中央防災会議(内閣府)は2004年、地震本部が警告した津波地震について、福島沖から

房総沖の区間では「防災の検討対象にしない」と決めた。「繰り返して起きていない」という理由だった。地震本部の長期評価部長・島崎邦彦東大名誉教授は、中央防災会議が地震本文部の予測を受け入れなかったことについて「原発が絡んでいる」と推測している。もし地震本部の予測通りの津波に備えるとなれば、津波対策を大きく見直す必要が生じたからだ。三陸沖の大津波を予測していた女川原発（想定13.6m）に比べ、福島第一（同5.7m）や福島第二（同5.2m）、東海第二（同4.8m）の想定は低かった。これらを女川並にしようと思えば、防潮堤を作ったり、建屋や機器類の浸水を防いだりする工事に相当な費用がかかる。

一方、政府レベルの動きとは別に、茨城県は2007年10月に独自の津波浸水予測を公表した。これは中央防災会議が「検討対象としない」と切り捨てた福島沖から房総沖の津波地震を想定している。想定をまとめた三村信男茨城大学教授は「中央防災会議の方針は知っていたが、過去一度起きていて記録もわずかだが残っていた。可能性があるならきちんとして考えた」と説明する。茨城県は、このような津波地震が房総沖から茨城沖まで伸びる震源（M8.3）で発生した場合を予測。その結果、東海第二の地点で津波高さ5.72mになり原電が想定していた4.86mを上回った。

茨城県に自分たちより厳しい津波想定を公表されてしまった原電は対策見直しを余儀なくされた。そこで側壁の新設を始め、東日本大震災の2日前に工事が終わった、というのが真末らしい。

（中略）「東海第二の廃炉を強く言わなければならない」。東海村の村上村長がそう意識し始めたのは、6月18日に海江田万里経済産業相（当時）が原発の安全宣言をし、運転再開を求めていくと発表したときだ。「福島第一の検証もすんでいない。避難している地域住民の救済も出来ていない。そんな段階で『安全性が確認された、再開する』なんて、こういう国は原発を持つ資格はないと思った」（後略）

東電、電気料金に上乗せ→保養所・高利の財形貯蓄…

東京新聞 12月20日

東京電力が、保養所や接待施設の維持管理費、年8・5%もの利子が付く財形貯蓄などさまざまな社員優遇に必要な費用を、電気料金を決める際の原価に算入し、電気料金で回収していたことが本紙の調査で分かった。こうした事実を東電も認めている。東電の手厚い福利厚生は、電力会社を選ぶことができない消費者の負担によって維持されてきたことになる。

電力料金は「総括原価方式」と呼ばれる方法で算出される。施設の修繕費や燃料費など発電に必要な費用を積み上げ、電力会社の利益を上乗せし、その

■東電の電気料金の中にこんな原価も

社員専用の飲食施設「東友クラブ」・接待用飲食施設「明石倶楽部」・熱海などにある保養所などの維持管理費／女子サッカーチーム「マリーゼ」・東京電力管弦楽団などの運営費／PR施設（渋谷電力館・デフコ浅草館など／一人当たり年間8万5千円の福利厚生費の補助（他産業平均では6万6千円）・健康保険料の70%負担（「同50～60%」）／社員の自社株式の購入奨励金（代金の10%）・年3.5%の財形貯蓄の利子（利子補て業がない企業がほとんど）／業界団体・財団法人への拠出金と出向者の人件費／オール電化PRの広告宣伝費

総額を電力料金で回収する仕組み。

ただ、費用に何を計上するかは電力会社の判断に任されている面が強い。既に、官庁OBを受け入れている財団法人への拠出金や広告宣伝費など発電とは関係のない費用に入れられていたことが半明している。経済産業省の有識者会議（座長・安念潤司中央大教授）は今後、これらの費用は計上を認めない考えを示し、同省もその考えに従う方針だ。

発電とは無関係のものが費用計上されていると新たに判明したのは、ハード面では静岡県熱海市など各地にある保養所や社員専用の飲食施設、PR施設などの維持管理費。

ソフト面では、財形貯蓄の高金利、社内のサークル活動費、一般企業より大幅に高い自社株を買う社員への補助、健康保険料の会社負担など。

福島第一原発事故を受け、東電の電力料金引き上げが検討される中、経産省の有識者会議は、手厚い福利厚生費用を電力料金に転嫁することを問題視している。燃料費などに比べれば金額は小さいが、不透明な部分はなくするため、原価から除外させる方向で議論を進める見通しだ。東電自身も保養所の廃止や福利厚生の縮小などを決めている。

東電は原価に計上してきた事実を認めた上で、「（電気料金を決める）経産省の省令に基づいて、福利厚生の費用は過去の実績や社内計画に基づき適切に原価に算入してきた」とコメントしている。

●電気料金支払い拒否のハウツー（某ブログから転用）

・期日までに支払わないと20日以降電気止める、という通知が来たので、20日の13時を指定して「原発分を除いて払いますので取りに来てください」と通知しておいたのだが、集金にも来てないし、送電も今のところ止まってない。「10アンペア契約だし、全額集金しても2千円にもならんし、人件費かけて集金に行ってるうさぎこと言われたら割に合わん、勝手に使わせとけ」なんて思ったのかどうか・・・

・私は事故のあとで、すぐに東電に電話して口座引落しをやめ、振替用紙払いに変更した。すると毎月、東電の職員がポストに振替用紙を入れるようになったので、私は支払わず、この用紙を玄関にピンで留めて重ねていき、闘いの日を待った。

・毎月遅集料金をとられるぎりぎりの前日に指定して、とりにきてもらう。

・昔、「ひとりでもできる反原発」アクションとして「電気料金不払い運動」というのがあった。全額不払いは不可能でも、「原発で作っている料金分を計算して払わない」というやり方。

・朝日新聞（11/24）「プロメテウスの罠 無主物の責任（1）」によれば「原発から飛び散った放射性物質が『無主物』で東電の所有物でなく、除染義務はないと東電は主張。これでいけば原発から出た電気も無主物で東電の所有物ではないから料金は発生しない、との論理が成り立つ

・先日、「終焉に向かう原子力」講演会の二次会で、上記友人が「不払い」報告したら、講師の一人の広瀬隆さんが「みんなでやらないと意味ないんだよね」と発言・・・そのとおり。